

若き日の詩人たちの肖像

堀田善衛

新潮社版

若き日の詩人たちの肖像

一九六八年九月二十五日印刷
一九六八年九月三十日発行

価七五〇円

著者 堀田 善 衛

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話(調)三二 振替東京会

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本所

(五丁、落丁本はおと
りかえいたします)

■ 目次

扼殺者の序章	5
第一部	9
第二部	77
第三部	211
第四部	359
作者から挨拶	438

若き日の詩人たちの肖像

Dis, qu'as-tu fait, toi que voilà.
De ta jeunesse ?

語れや君，若き日に何をかなせしや？

——ヴェルレーヌ——

扼殺者の序章

少年——たしかに僕は故郷を出る道筋にいた

そこで記憶が中断する

火田民が襲って来て

そのどきくさに

機を見て僕はお前を扼殺したらしい

この詩が書かれたのは一九四七年の二月か三月のことであつたろう。「渾身の風景」と題されたものの一部である。男はその直前、一九四七年の一月に引揚船で上海から帰って来たばかりであつた。

「僕は故郷を出る道筋にいた」というのは——自分でも可笑しくなって来るのを我慢しているのだが、要するに書かれた詩の中身を説明するなどということは莫迦げたことだ。がしかし、ここでその説明にしばらくこだわりたいと思う。

「故郷を出る」とは、人を喰つたり喰われたりして暮さねばならず、そうすることのほかには生きる方途を許されていないのだということの自覚と、その表明であつたかもし

れない。そうして「火田民が襲って来て、そこで記憶が中断する」——火田民とは、それはここでもまた、要するに、とうとうほどのことだが、戦争及び戦争直後ということであつたろう。「そのどきくさに 機を見て僕はお前を扼殺したらしい」——お前、というのは、甘やかな少年期というものであつたであらう。

記憶の中断、欠落は、言うまでもなく火田民のせいだけではない。そのどきくさのなかに、自ら進んで、その青春時の、それこそ穴があつたら入りたいほどの恥ずかしい事柄や事件を、自分に強いて渾身の砂地に穴を掘り埋葬をしてしまったということもある筈である。またさらに、戦時と戦後の、事故と陥穽にみちみちた時間の間に、男のこして来た筈の書きものなどの非常に多くのものが失われてしまい、また彼らの若かつた詩人たちの仕事や記憶もまた時間のなかに、ひとしく失われてしまったものが多いということも含まれていよう。

扼殺し、扼殺されたものは少年期というもののだけではない。男はいまこれを書きながら、自分の手に、指と手のひらに明らかに、ある不気味な感覚を感じている。あるやわらかな、たとえば少女、あるいは女の首を絞めて扼殺したという、なま温かくいくらかのしめりをおびていて、しかもやわらかい皮膚とその下の薄い肉、そうしてそのまた下にある、いくらかはごつごつする、たとえば咽喉佛をばりばりと親指と手のひらの力でうち砕き、次第に指に力をこめて行つて指がぐいぐいと肉に食い込んで行き息のおをと

めさせ、ついに扼殺のことをしとげたという、指と手のひらにねばりついてはなれぬ感覚が、確實にあることをみとめる。扼殺者の指とその爪の食い込む手のひらが、いま、万年筆をはさみもってこれらのことばをしるしているとあきらかに男は感じているのである。

自身の指と手のひらに、扼殺者としてのうずくような感覚が、真実にうずうずいてこびりつき、離れようともしないのである。それは、戦争がおわってからの二十数年、あるいは白紙にことばをしるすことを性としてからの三十年をへても、いまになお指と手のひらの皮膚になまなましく生きてのこっている。男がしめ殺したものが何と何と何であつたか。

「一九四三年

強烈な太陽と火の董^{すみれ}の戦線で

おれはなんの理由もなく倒れた

おれの幻影はまだ生きている」

「おれはまだ生きている

死んだのはおれの経験なのだ」

「おれの部屋は閉ざされている

しかしおれの記憶の椅子と

おれの幻影の窓を

あなたは否定できやしない」

われわれはこの地上をわれわれの爪で引ッかく

星の光のような汗を額にうかべながら

われわれはわれわれの死んだ経験を埋葬する
われわれはわれわれの負傷した幻影の蘇生を夢みる

右の詩は田村隆一の「一九四〇年代夏」と題されたものの一部であるが、戦時の、赤い色をした死への招待状が、おそらくは何十万台の番号をつけてあらわれるのを待っていた、そうして実際に戦場へまともてつき出されて、敗戦が来て、死の季節の、黒枠でかこまれていた男が、この詩に刻み込まれているように倒れた男としてその季節をとおって生きのこってみると、やれやれ一安心などということではまったくないで、自らに殺人者を見出さなければならなかつたという次第であつたろう。負傷した幻影がふたたび蘇生するかどうかは、はなはだあやういものであるう。

死んだ経験を埋葬しなければならぬ、その当の男が死にかけていて、その死にかけている男が自らに殺人者、扼殺者であるという自覚をもっていたりしたら、負傷した幻影がたとえ蘇生したとしても、生きのびて行く機会、これもまたはなはだあやういものであらう……。

第一部

驚くべき夜であつた。親愛なる読者よ、それはわれわれが若いときにのみ在り得るやうな夜であつた。空は一面星に飾られ非常に輝かしかつたので、それを見ると、こんな空の下に種々の不機嫌な、片意地な人間が果して生存し得られるものだらうかと、思はず自問せざるをえなかつたほどである。これもしかし、やはり若々しい質問である。親愛なる読者よ、甚だ若々しいものだが、読者の魂へ、神がより一層しばしばこれを御送り下さるやうに……。

——ドストエフスキー—— 米川正夫訳——

第一章

中学生としての男は、文学少年といったものではなかった。むしろ音楽少年といったものであったかもしれない。北陸の、古い町である金沢で男は中学生の頃をすごした。そうして一九三六年（昭和十一年）の二月二十五日の朝、東京のK大学予科の試験をうけるために上京し、上野駅についた。試験はいうまでもなく三月半ば頃に行われるものであったが、それよりもずっと早く上京をしてしまったのは、この日、二月二十五日の夜に、九段の軍人会館で、交響楽団の演奏会が、その頃にドイツから帰って来たある新進指揮者のタクトによって行われることを田舎の音楽少年が知っていたからである。少年は靖国神社裏の富士見町にあったじぎの兄の下宿に落着いた。その夜の演奏会のプログラムには、ラヴェルのボレロとベートーヴェンの第五交響楽が入っていた。ラヴェルのきらびやかな舞曲であるボレロと、ベートーヴェンの運命交響楽というとりあわせは、どう考えても一晩ぎりの演奏会としては妙なものである、というほどの判断がつく程度の音楽少年で、この少年はありえた。だからこの指揮者は、自分が指揮しうるもの、こ

なせるものの範囲の広さを、この性質のまったく異なった二曲をプログラムに入れることによって示そうとしたのであろう、と少年は考えていた。

少年は、それまでに生の交響楽団の演奏を聴いたことがなかった。だから、ボレロの、あの異様なまでに単調な、同一のメロディとリズムを、異様なまでに何度も何度もくりかえしまぎかえし、そのくりかえし毎にオーケストラというものの機能と能力のぜんぶを、あくまで、しつこいほどにも華麗に展開して行く演奏を聴いているうちに、ついにその音楽のなかへ、生理的なまでに、からだごとまるまるまきこまれて、とうとう異様な経験をしてしまったものである。

演奏がはじまってすぐに、少年はもうからだの具合がどうも妙だな、と感じていたのである。からだ揺れる、というのではなしに、肉体の動きを統御してくれる管の、脳髓のどこかの部分が、単調なメロディがくりかえされるにつれて次第に痺れて来るかに感じられ、その痺れが次第に大きくなって来る音の波にのせられて揺れはじめ、音楽が最終的に痙攣（けいれん）しはじめて爆発的なまでの巨大な音の波を崩して向う側につきぬけて行ってしまい、そこに盛大な拍手につつまれた無力な静寂が訪れたとき、少年は下腹部に冷たいものを感じたのであった。

そのときの愕（おどろ）きと歎（なげ）きは、少年を長く支配するにいたったものであった。中学を出たばかりの、受験生の自分が、一つの音楽に、かくまでに、性的なまでに攪乱（かくらん）されたと

いうこと、芸術によって肉体の全体を占領され得る、自分がその容器たりうるという事実が与えた自信は、少年に託ってかけがえのない経験であり、またそのことの裏側にあったもの、つまりは運ばれやすい性質であるということには気がついていなかったのであった。

軍人会館は、靖国神社のすぐそばであり、降り出して来た雪を踏んで少年は富士見町の下宿へ帰った。夜おそくまで、少年は昂奮して眠れなかった。ラヴェルのボレロは、音楽としてはそれほどものではないにしても、とにかくスペインの舞曲にもついていたものであり、華麗な音響配置の下に、言うとなれば、ある種の、動物的なまでに陰気なスペインの憂鬱をよどませているものであることを、現在の男は知っている。また、腰の細いスペイン男を主とするスペイン舞踊というものが、本当に動物的なまでに性的なものであることを承知している。スペイン舞踊のうちの、女の踊り手の役割は、あれは外国人にもやって出来ないものではないが、男の踊り手の野卑さ加減と繊細な洗練とが細い腰と腕によって、あたりにねばりつくばかりに発散されるエロティシズム、陰鬱に陰にこもったようなあのエロティシズムは、スペインの男たちだけにしか表現出来ないものであろう。闘牛もまたスペインでそれを見ていれば、そこにエロティシズムの占める部分がきわめて大きいことが自然に納得されて来る筈なのである。それは男壮とか闘士と野獣といった要素からはきわめて遠いものである。むしろ、美女と野獣といった方が近いくらいのものであり、

観客たちがくりかえしまきかえし、波のようにあがる歓声もまた、たとえばボレロなどという音楽を自然に思いつかせるものである。殺されて土に横たわり、駄馬にひかれて行く牛の屍は、あれは射精の後の、もはや役に立たなくなったベニスであり、剣をふりあげて勝利を誇っている闘牛士は、あれはあれで勃起したベニスを自然に連想させるものである。

そういうことを現在の男は知っている。けれども、受験生は熱い頭をかかえて眠りをなさなかった。少年は別の大学の学部一年生になっていた兄が、上京初夜を迎えた弟を放ったらかしてどこへ行ってしまったのか、眠りをなさぬままに、二つならべて少年がしいた布団のなかで兄の帰りを待っていた。兄が、かなり無頼な学生であることは、少年はとうに知っていた。前年の秋、スキートの選手であった兄はヨーロッパでの冬期オリンピックの選手に選ばれ、出発直前に肋膜炎を病んで渡航が出来なくなった。彼は泣いて口惜しがったものであった。スキートの選手であると同時に、玉ツキは七〇〇台をついてプロ級であり、麻雀は四段とかいう、普通の意味では途方もない学生であった。スポーツや遊びごとには、天才的と言っても言いたくなるほどの才能を発揮したことも少年は知っていた。窓枠にたまる雪を見上げながら少年はその兄の帰宅を待っていた。しかし兄は帰らなかった。

兄は帰らなかったのではなくて、友人宅へ麻雀をしに行つて、すでに二月二十六日の午前に入っていて、実は帰れ

なかったのであった。

後日二・二六事件と呼ばれる、軍隊の叛乱が起っていたのである。しかしこの雪の日に、下宿にとじこもって受験勉強をしていた少年は、夕方近くまで何事も知らなかった。国家というものには、それが国家である以上は、内乱がつきものであるということについても、少年は何事も知らなかった。それはいかなる国の歴史にもあったし、これからも屢々あるものの筈であるということも知らなかった。そうして国家は、そのときの時限においてその成り立ち方をくつがえそうとする者に、死を課するものであるということも本来には知らなかった。町には物音はなく、雪のなかでひっそりとしていた。雪のなかでの、鼓膜を押し来る静けさには、少年は幼い頃からなじんでいた。そういう静かな、充実した時間のなかでの勉強はむしろ快いものであった。少年は国語の準備をしながら、こういうときにはブラームスかシューマンが向いている、と音楽のことばでこの内にこもった静かさを量っていた。

兄の大学生は一日おいて二十七日の午後になってから青白く緊張した顔つきで帰って来た。肋膜炎を病んでスキーを廃してからは、この兄は顔から雪焼けを失っていた。兄が帰って来ると同時に、小さな下宿屋は急にさわがしくなった。また近所からはまだ明るいのに雨戸をしめる音や釘をうつ音などさえが聞えはじめた。もはや勉強も、またブラームスやシューマンどころのさわぎではなかった。

「おい、あのな、避難命令が出たんだ。夕方までにな、布

団と身のまわり品をもって市ヶ谷の小学校へ集合しろっていう命令が出たンヤ」

「へえ……。誰がそんなもんを？」

「そんなもんって、戒厳司令官だぞ。大変なんだぞ。お前にも知らんのか？」

「知らんことはない。だけど新聞もラジオもありやせんから」

兄は大変、大変をくりかえした。彼は新聞などという無駄なものはとらず、ラジオがあつた形跡はあつたが、近所の質屋へあずけてあつたものであつたろう。

「あのなア……」

と言って兄は事件の概略を説明してくれたが、少年はほとんどなんの興味ももたなかった。『大変』ということばについては、少年は曾祖母からすでにある種の心構えのよいうなものを教えられていた。北国の小さな港町に、二百年ほどのあいだ、北海道と大阪をむすぶ、いわゆる北前船の廻船問屋をいとなんで来た家の曾祖母は、米をめぐるの民衆の騒乱のことを知悉していたものであった。廻船問屋は、廻漕問屋とも言ったが、それは米穀肥料の問屋をもかねていたから、米穀の類を買い叩き、これを倉庫に積んで値の上るのを待つ……。米騒動は、何も一九一八年（大正七年）の、少年の生れた年に、その生れの港の対岸にある滑川の女房連が發起して全国に及んだものに尽きるものではなかった。一回きりのものではなかった。明治以前にも、明治期にも、断続して米をめぐる暴動あるいは騒乱は、何

度も何度もあったものであった。大正期のそれは、滑川からすぐに少年の生れの港に波及して来た。曾祖母は、直ちに家の者、店の者の先頭に立ってきばきと指示をし、家の者、店の者、召使たちなどのために別々にしつらえられていた巨大な風呂釜で粥をたくことを命じた。

「こんながにして、騒ぎのつづいたあいだじう、ずうと人民に粥をくばって騒ぎをおさめたがや。滑川の者どもはガラやがいね。心得のないことをしてしもて」

と、少年がもの心ついたときに教え、問屋というものは問屋としての心得があることをさとしたことがあった。

そういう曾祖母の、漆塗りの古佛のような顔は、少年の心にある畏怖感を印したものであった。ここで滑川の者ども、といわれる者は、言うまでもなく滑川の問屋衆ということであり、ガラとは莫迦の謂いである。明治の民権自由運動の壮士たちの後援者でもあった老婆は、「人民」ということばを使つたものであった。

曾祖母は、すでに死んでいたが、あの老女に言わせれば、二・二六の大変もまた、宮中や政府の者どものガラみたいな心得のなさ加減、ということになるであらうと、皺だらけなくせに、妙な具合にのっぺりとした風に見えた曾祖母の顔をちらりと思ひ出したものであった。

下宿屋の一室にこもって受験勉強をつづけているものにとって、一日のおわりというものは別して区切りとはならない。だからまる一日をあいだにしているとはいふものの、少年にとっては、すぐ近くの軍人会館が戒厳司令部に

なったということは、昨夜あそこでボレロと第五交響樂を聴いたというのに、一夜あけてたちまち、まさにその同一の建物が、戒厳令とかという天皇の命令を執行する血に染んだものになったということである。

ここで血に染んだ、というのは、これについても曾祖母とかかわりがあった。あるときこの老婆が大正天皇の御真影なるものを見上げていて、

「この陛下のおひげに血はついたらんが、わしらの陛下は、いくさでたんと（沢山）血を流されたがや」

とふと言つたことがあったからである。わしらの陛下とは、言うまでもなく明治天皇のことであり、このことば一つで、小学生である少年には、天皇陛下ということばには、いつも血のついたものとして印象されているという結果があった。

スペインの舞樂であるボレロと、戒厳司令部とは、へだたることあまりに甚だしいものがあった。

「あのな、戒厳令でな、言うこときかん叛乱軍は射つてしまえ、と天ちゃんが命令されたんや。それでな、もうすぐにもはじまるかもしれないや。じゃからこの近辺にも流れ玉がひょっとしたら飛ぶかもしれないから、布団をかついで市ヶ谷の小学校へ避難しろって命令が出たんや」

「ふうん……」

しかし少年は、せっかく落着いて受験勉強が出来るようになったのに、という思ひばかりで、到底布団などをかっいでべちゃべちゃの雪だけ道を歩いていくなどという惨め